

◆訪問メモ◆

桑崎無人部落



木曾路の入口、古来から桜沢と呼ばれるけわしく深い沢から、トンネル工事の現場のうなりを下に聞きながら、徐じよに登ってゆく。その道は自動車を通れるとはいえず、山の斜面に沿ってけずられ、谷に崩れかかったところどころを木材で補強してある。途中一、二ヶ所、塩尻市水道局の管理人小屋がある以外は人家もなく、杉や唐松にびっしりおおわれた山が両面から迫っている。暖い冬のこと、積った雪は溶けて、陽のあたらないところでは氷となって運動靴で来たことを後悔させる。

道は曲がりくねり、ときにはばあつと明かるくまぶしいところに出る。川がすぐ脇を流れ、そこだけ山が退いて歩みを止めて一服できる暖いところだ。柔い雪の上にはうさぎや鳥の踊ったあとが複雑な模様を作っている。ここは鳥の声もひとしきりはやんでいる。

道が左右に分かれる。左に行けば牛首峠

を通って伊那の地に、右に行けば目指す桑崎部落に。今はどちらの道もときおり狽に薪採りに、伐採に通る外は使わぬ道である。伊那は木曾と違い平野のある米所、積雪、寒さも段違いに少なく、この二地方と違って他方は異国であった。権兵衛峠、牛首峠など、馬が鈴を鳴らして米を背に往来したものである。

落合と呼ばれるその分かれ道を右に、桑崎に向かう。もう半分以上来ているはず。もうすぐである。不相応に立派な、途中のコンクリート橋を渡って斜面をぐうっと回りこむと、そこに突然平地が開けている。標高一〇〇メートル、北を向いたゆるやかな傾斜地に家が黒く点在している。中型トラックがドアの開いたままに道ばたに放つてある。三年間以上も使われなかった田んぼには、枯れた背の高い雑草が繁茂している。なかには唐松を植えてしまった田畑もある。

部落のとつつきに戸の開いた一軒がある。「ごめん下さい」と言っても答えるはずもなく、ひんやりした空気に家のがらくたの臭いがしみついていて、よんだ空気が無気味に重い。土間から室内を見ると、畳はところどころはがされ、小学生のランドセル、教科書、手紙、人形、雑誌など、ぶちまけたように散乱し、枕のそばがらが方々に散つてすさまじい荒れよう。柱や梁だけが立派にすすけた太さをみせて丈夫な家を支えている。

この集落、長野県木曾郡楢川村大字贅川字桑崎、通称桑崎地区は、昭和四三年一月に一七戸、七七人の全住民が集団移住して、部落はまったくの無人となってしまった。

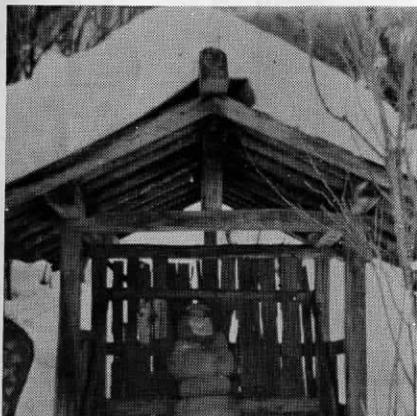
すなわち当地は「村内でも最も交通にめぐまらず、地勢急峻にして農耕地少なく、高冷地の悪条件に悩まされながらも自活の道を拓くべく、林業に製炭に、あるいはまた養蚕、高原野菜と、また最近はその指導による肥育牛事業にと努力してきたが、いずれの仕事も時代の変遷と共に良き結果が得られず、離農者が続出、第二、三次産業への転職を余儀なくされ、これに加えて通

学、進学に不便であり、所得も低く、当地区での今後の発展が望めないで、ついに部落をあげて移住するの止むなきに至った（楢川村役場「集団移住概況」）のである。と同時に、村の側としては手を尽くしたが、桑崎地区は「過剰投資地区」であり、今後の発展は期待できないと判断した。

更に、昭和三十九年に提出された信大農学部松沢盛茂教授の「構造改善に関する意見書」によれば、この地区で近代的な文化・生活水準に見合った生計を営むことは不可能に近く、このような土地にしがみついた生きねばならぬ山村農民をなくすことこそ構造改善事業の目的ではないかと述べ、居住地をもっと基幹道路に近く選び、もしも父祖の地への執着が断ちがたければ、そこに通勤して農耕することを提案している。

それから四年の後、桑崎の住民のうち、一一戸は贅川駅の脇に新しい桑崎地区を形成した。そのための資金には村と県の集団移住補助金、自己資金、村のあつせんによる低利借入金などがあてられた。その他の家族はバラバラに村を離れていった。

山中村と呼ばれ現存する古文書に初めて顔を出してから二五〇年後、桑崎のこの地



は父祖に似たあの人々を失った。その間、住民の生きるための基本条件であった山林が御料林に、村有林に、国有林に、顔こそ違え代々の「おかみ」によって理不尽に取り上げられた。住民としてそれに無抵抗ではありえなかった。養蚕、薪炭、シイタケ、アスパラガス、酪農、肥育牛、次々に工夫をこらしてきた。しかし「おかみ」はこれでも生きよ、これでも……と「部落の手足を次々に切り離すような」（「陳情書」）ことを無邪気にやっていた。今に至った。部落に有線放送の入った時の喜びはどんなだったことか。部落の公民館にあるマイ

クの前に、部落の主婦が当番で詰めてニュース、お知らせを恥づかし気な東京弁で部落中に響かせた。その姿が声か「いやに鮮明に脳裏に浮かぶのである」。（武田九邦「桑崎地区概要」）

人口の流出と共に、子供の通学路確保のための雪かき当番、有線放送当番、分校の給食当番、子供の寄宿舎当番、山の下草刈りの扶役、道直し扶役、……これら、かつて笑いにあふれていた共同作業が苦役に、そしてついに不可能になり、部落は自然から要求される最低の共同義務も果たせないほどに衰退し、崩壊した。

この地、これらの人びとは日本になんの小さな影響も与えなかった。こんな部落が何百何千と存在する。しかし、日本の国はこれらの地に、人びとに何をしてきたか。国や県や村をあてにしてはならないとは彼らの言葉である。それならどうしたらよいか？ カソカソ言う抽象論、原則論は学問的に見えて実は集権レベルの仮装でしかない。そんな言葉で語ることをしかできぬばかりは一体何だということか？（百瀬記）

キブツの生活(2)

シュロモー・タミール
百瀬 直彦(訳)

——はじめて耳にする人のためのキブツの紹介——



■キブツの子供たち

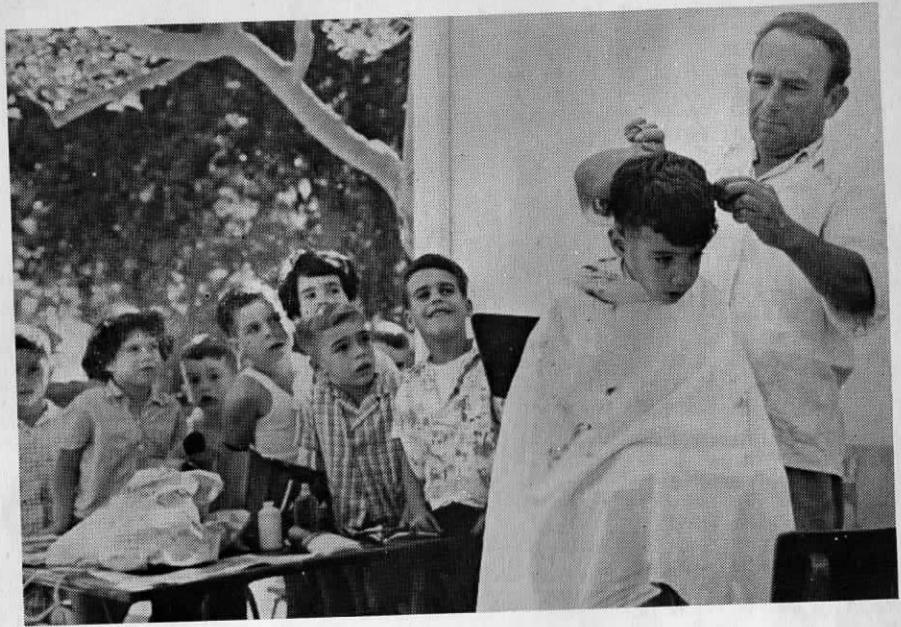
キブツの子供たちは種々の「子供の家」に生活している。母親は子供を産んでから四、五日たつて病院から子供を乳児の家に移す。母親は六週間程のあいだ働かなくてもよい。もっともこの期間は母親の健康状態によって長くも短くも調節される。母親は食事は運んでもらう生活でなく、毎日食堂で皆とともに食事する。赤ん坊の汚れものは皆のものと一諸にキブツの共同洗濯場で行なわれる。赤ん坊は乳児の家の看護婦(メタベレット)が面倒をみてくれるので、母親は時々乳を与えに行つて、赤ん坊の様子を見ていればよい。約六週間の産休ののち、乳児の家の近くに仕事場を持ち、赤ん坊に近いとこで必要がある場合に備えている。それに続く数ヶ月間、母親は普通の人より短時間で仕事を切り上げることができ

る。子供が大きくなるに従つて、かれらはゆりかごの中から芝生のびつしり植わつた、ブランコや砂場のある柵に囲まれた遊び場に出る。そして幼児の家(幼稚園)、学校へと進んでゆく。乳児の家では子供たちは一人づつ別々のベビーサークルに入れられているが、幼児の家では子供たちは一部屋に数人づつ収容されている。かれらの寝室は、子供部屋の食堂、シャワー、トイレ、遊び部屋、教室、その他付属施設と同じ棟の中にある。また同じ棟の中に、診断を受けるべき子供たちが、当座安静にしている病室もあり、医師の判断によつて病院に送るか、子供たちに混じつて遊ぶかする。

幼児の家の保母(メタベレット)の助けを得て、子供たちはシャバット(安息日)やお祭りの晩には、子供の家の食堂でパーティー

や、音楽、寸劇、ゲーム・パーティーなどをする。もう少し大きくなると大きな子供たちに混じつて子供会のように活動する。子供たちはキブツから機会を与えられると、自分達で劇や歌、踊りのプログラムを作り、練習し上演する。大人たちもそれを楽しみにしている。

一五才から一六才(日本の高校生と同じく義務教育ではないが、キブツでは皆が進学することになっている)になると、子供たちはひとり部屋、あるいは二、三人部屋を与えられ、そこで勉強し、読書し、休息し、友人と時をすごす。食事はキブツの食堂で大人たちと一緒に食べる。自分の部屋を持つとはいつても、夕方のひとときは両親の部屋に来て顔を合わせ、その日のこと、その他さまざまなことについて語り合う。音楽と一緒に聞く家族もあれば、静かに読書することもあるし、両親に教わつて勉強することもある。コーヒー、お茶、ココアなどが用意されていて、夏の天気の良い時には家の前の芝生にすわり、ねころび、話すこともある。あるいはまた、親子そろつてキブツの運動場やプールに行つて運動することもある。夜、両親は小さな子供たちをそれぞれの子供の家に寝かしつけに行き、子供たちはシャワーをあびさせ、食事させ、パジャマに着替えさせ、ベッドに入れ、そのかたわらにすわつて本を読んでやつたり、お話をしてやつたりする。いくつかのキブツでは大きな子供たちは両親の家で寝ることになっている。その場合、家族にはもうひとつ余分な部屋が割当てられる。更にいくつかのキブツでは小さな子供たちが両親と同じところに寝て、大きな子供たちが自分たちの部屋で寝ることもある。子供たちの家には、夜間の面倒をみるために夜警がつく。この任にはキブツの女性が当番であつたことが多い。



子供の家の保母は仕事については専門職である。必ず特別の保母養成学校などで、そのための訓練を受けなくてはならない。キプツ連合（いくつかの思想を同じくするキプツの連合）はそのための教育機関を持っている。小、中、高校生の各クラスにも、衣類の世話から生活の面倒をみる女性の世話係がついている。医師の診断にも立ち会ったり、子供たちの旅行にもついてゆく。ひとりひとりの子供のかくれた悩み、病気に常に気を配り、事前に発見し、処置を講ずる役目を負わされている。そしてかれらは救急処置の方法にも長じている。

親子関係

キプツ外で一般に信じられているような、キプツの子供は両親から離れているので、普通に育てられた子供たちより親への愛着は薄いのではないかと、という意見にはまったく根拠がない。キプツの子供たちはごく小さな時から親から離されて子供の家に同年令の子供の集団の間に収容され、親とは夕食前の一、二時間しか顔を合わせないことから、間違って結論されたものであろう。こういうひとは、その両親の家での家族の顔合わせがどんなに密なものかを考慮に入れることがないためである。父、母ともに仕事から解放され、すべての時間を子供のためにさくことができる。そして普通の家庭では

とうていできないような親の世代と子の世代の徹底した交流がおこなわれる。

時によつては、時代の混乱にまぎれて勉強できなかった両親も、子供とともに勉強をすすめることがある。二、三人の子供と一緒に宿題を済ませると、両親自身もずいぶん勉強することになる。時両親を対象にして、聖書、文学、ヘブライ語の講義がもよおされる。というのも、子供に聞かれて恥ずかしい思いをしなくてもよいように、ということからである。だからキプツでこそ、両親は子供とともに誰にも邪魔されない時間をすすることができ、またそれは子供にとつても親との、ひいては前の世代との交流の時間なのである。

シヤバットや休日には、母親は食事の世話、買物、家の片付け、その他こまごました仕事にわずらわされずに家族と休日を楽しむことができる。キプツ以外に生活する主婦が、朝起きて朝食の準備から、収入を補うための雇用労働、家の掃除、食事の準備、あと片付け、子供の世話と、一日中働きつくめなのにくらべて、キプツにおいてはゆつたりした自分の生活がいとなめる。

選択の自由

キプツに生まれたほとんどの子供たちは、大人になってもそのキプツで生活が続ける。結婚する際にも配偶者とともにそのキプツの中で家庭をもつ。

学校に居る間子供たちは、町の子供たち、他のキプツの子供たちと一緒に旅行したり、パーティーをもよおしたりする機会に恵まれている。高校を終えると子供たちは兵役につく。現在男子三年、女

子二〇ヶ月が兵役義務期間である。このあいだに、かれらはあらゆるところから来ている同年代の青年男女と行動を共にすることとなる。その兵役義務期間のうちに、キプツの青年たちはさらに一年間の奉仕活動として、若いキプツの援助に滞在するか、あるいは都市の青少年キプツ運動のリーダーの役を努める。

このようにしてキプツの外の世界がどんなものであるか実際に体験する。そののちに、かれらは自分の生まれたキプツにメンバーとしてとどまるか、他のキプツに行くか、街に出て働くか選ぶのである。そのまま自分のキプツに留まるのが大多数であるが、かれらはキプツ的生活が自分にとって適していると判断するからこそそうするのである。強制は勿論ない。望めばモシヤブ（キプツよりは大都市に個人経営的性格を持った共同村）にも、町にもゆけるのである。キプツ出身の若者はどこでもひっぱりだこである。というのもキプツ出身者は一般に我慢強く、責任感が強く、何らかの技術をもっていて、リーダーシップに長じ、体力もあるからである。

今のキプツのメンバーの大多数は、数十年前に外国からイスラエルに移住し、キプツを創設した人々の子供であり、キプツ内の責任ある部署——書記、委員会、外部組織との連絡——について主な活動の原動力となっている。

キプツの学校

どのキプツもそのキプツ独自の学校を持つとしてはいないが、経費の関係、教職担当者あるいは未来の教師のための労働力の減少の関係から、大きな、豊かなキプツが一二学級、一八才までの教育施設をもっている。いくつかのキプツではキプツ外の子供を有



料でひきうけてキブツの子供たちと共に教育している。独自の学校の持てないキブツは、となりあった他のキブツと協力して学校を保持している。

カリキュラム

独自に経営されているとはいっても、イスラエル教育省の定める基準に従ってカリキュラムは設立されている。かつては、キブツの子供たちは協調性、性格、体力、感性の面では申し分ないが、学力すなわち知識力の面では町の子供に比べて劣ると言われていた。それというのも、キブツの子供たちは正規の定められた授業の外に、小学生ならば例えは週二時間程度、高校生になると週一〇〜一二時間程度の労働実習が含まれるからである。この労働実習はキブツの各職場で行なわれ、自分の志向に合った職場で、実習と、常に不足なキブツ労働力を補う意味で、キブツ側からはあてにされている。この「あてにされること」を通じて、仕事へのまた他人への責任感がつちかわれてゆく。

キブツに特有な園芸、手芸、児童養育のコースなども適宜にコースに取り入れられている。またキブツ内に優秀な溶接、木工、電気技術者を育てるための実施訓練も授業の一環として取り入れられている。

特に最近の傾向として、町に住み勉強に専念できる子供との、特に大学進学時の学力差をなくすため、キブツは増加してきている。大学進学希望者に補習をするとか、労働時間を減らすとかしている。イスラエルにおける大学進学の問題は、少し横道に外れるがここに述べると、全国一律の規準のもとに、大学進学資格試験を通らねば

ならない。それは教科目別（数学、英語、社会科、ヘブライ語、作文、理科など）に、一年づつかかって手に入れてもよい。そして必ず兵役を済ませてから大学に入学することになっている。だから、兵役中に勉強して入学資格を手に入れるものも多い。

最近のキブツの若者たちは、昔ながらのキブツの伝統——手に技術をもつこと——よりもむしろ一歩進んで、もっとリベラルな位置、アカデミックな立場から自分たちの生活を、伝統を継いでいきたいと考えている。それが大学への進学希望者の増大となっている。また反面、キブツが豊かになって、より多くの人に高度な学問をする機会と資金を提供できるようになったとも言える。

労働と学習

我々キブツニクは自身の労働によって高い文化・生活水準に到達し、維持しようと思っている。それを実現するためには最大限の収量をあげなくてはならない。そのために専門的な知識——土地利用の方式、土地に適した作物、適当な作物の分産、種や苗の精選等が必要である。それとともに水や肥料を合理的に使用すること、食物を無駄なく消費すること、どんな場合にも種々の作物生産に最適な方法を駆使できるようにしなければならない。

キブツ運動（それから一般農業者のためにも）若い農業者あるいは経験ある農業者のための大学レベルの講座を開いている。ヘブライ大学、ハイファ工業大学、レホボットの農業技術研究所、ルツピン研究所、その他のところで、キブツの農業部門の指導者のために専門研究が組まれている。

今まで述べたような、いわば専門的な領域のほかに、これらの研

究所に入るキブツメンバーは、他の場所から研究に來ているさまざまな物の見方、暮らし方をする人々に出会い、一緒に旅行し、パーティーを開き、自分の見聞を広める。普通のように四年〜五年も学校に行かず、キブツメンバーは二年でコースを終える。この間、これらの生活、および家族の生活はすべてキブツによって保証されている。

そのほかキブツでは、日帰りの旅行、二、三泊の学習旅行、外国語のコースなどが常時もおかれ、誰でも参加する資格をもっている。ヒスタドルト（労働総同盟）が開催するセミナー・コース、その他にも各キブツはそのメンバーに積極的な参加を呼びかける。よいうするに、キブツにおいては、何か学習しようと思う場合には、キブツ内外を問わず、労働しながら、あるいは生活を保証されながら専門的に、学ぶ機会はあるのである。

社会保証

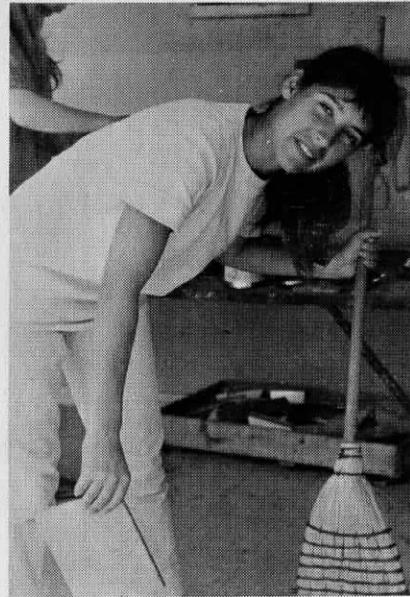
それぞれのキブツは豊かな社会的、文化的生活を実現するために、機会をみては改善に努めている。我々は現代社会の利点——機械化、専門化、組織、能率——をすべてそなえたひとつの社会——キブツ——を実現したいと思っている。しかしそれとともに、個人農家の利点——自分のため、家族のためにすべてのエネルギー、頭脳を自分の仕事に打ちこむこと——も持ちつづけたい。キブツの発展、安定はすべてひとりひとりの肩の上にかかっていると書いても言いすぎではないからである。メンバーの誰もが自分の能力を可能な限り開発しなくてはならない。そして最大限の能力、熱意、エネルギーを共同体にささげることができることが必要である。またその逆に、

誰でもが可能なかぎり必要なものはこの共同体から引き出せるよう
でなければならない。彼も、その家族も一生生活を保障されなけれ
ばならない。

健康管理

医療体制はキブツにおいては非常に整っている。どのキブツにも
ヒストルート（労働総同盟）の疾病基金にまかなわれる資格看護
婦が診療所にいる。大きなキブツでは医師も常駐している。安静療
養室もあり、病院への入院も程度によっては不要である。

より小さなキブツでは週に何度か医師が巡回診療に来て、必要に
応じて緊急呼び出しもできる。もしもメンバーが病気になったとき
は、病人は自分の部屋で安静にする。家族の者は仕事に出るが、そ
の代り看護婦が食事を運び身の回りの世話をしてくれる。



もし必要があれば病人は病院あるいは医院に行ってみてもらっ
てもできる。メンバー自身が巡回医師では不安と感ずるか、医師、
看護婦が必要と認めた場合におこる。イスラエル国内では治療の方
法が無い場合には、外国に送られることもあり、その費用はキブツ
側と疾病基金が共同で負担することになる。

病中、あるいは回復期の病人、その家族の面倒はすべてキブツ側
でみる。もし遠方に入院するような時の訪問に際しては、その訪問
者の一日の労働、旅費は勿論キブツ側が都合する。

祭日と休暇

イスラエルの国の定める国民的休日（シャバット、ペサツハ、ス
コット、その他）も、多くのキブツでは労働を完全に休むことはし
ない。五日間休日があれば、そのうち一日、二日全面休日になる程
度である。勿論、学校にゆく子供たち、大学生は休みとなり、キブ
ツでその学業の間に働くことになる。

メンバーにはその他に年二回ほどの休暇（一般には有給休暇）が
あり、それには二年に一回の割合で長期休暇がある。男性に
も女性にも同様である。このあいだ（一週間から二週間）そのメン
バーは家で読書に、散歩に、音楽に、好きなことをして過ごしても
よい。旅行に行く人が多い。しかし、それはその人個人の休暇であ
って、夫妻で休むというわけにはゆかないので、そのためには前も
ってよくアレンジしておかねばならない。

不具者

メンバーが怪我や病気によって一生労働できない身体になってし

まうことが起こることがある。そんなとき、キブツは彼にできる仕
事を探し、そのための道具をそろえることから、車椅子、松葉づえ
などの面倒をみる。その人がまったく動けないような状態のときは、
付き添いがつき、食事、排便、気晴らしの世話につく。この面につ
いては、キブツは決して骨惜しみをしない。誰がいつそうなるかわ
からないからである。働ける、働けないにかかわらず、キブツは一
生そのメンバーの身の振り方に責任を持つ。

メンバーの両親

キブツメンバーの両親は子供のいるキブツに加わることができる。
さまざまな方法でこれはおこなわれるが、同時にある種の条件もつ
く。もしもその両親が若く、労働に耐えられるようならば、彼らは自
由にメンバーに成るために申し込めばよい。キブツの総会がこれを
承認すれば二人は正式にメンバーとしてキブツの子供のもとに一緒
に暮らすことができる。もし両親が老いていて、独力で町では生活
してゆけない場合、そして子供はキブツにいる一人だけの場合、キ
ブツがかれのキブツに来て、生活することを認める。キブツの外
にも子供がいる場合には、キブツはそれらの子供にも生活費の一部
負担を要請する。逆にキブツのメンバーの両親が町で暮らしている
場合には、キブツ側でその両親の生活費の一部を負担する。

キブツでのそれら老人達は、メンバーとまったく同じく必要なも
のはすべて与えられ、一生の間世話が受けられる。また自分にでき
る仕事を強制されずにできる間につづけることができる。



第九回キブツ研修生壮行会

共催
イスラエル大使館
日本協同体協会

昭和四十七年四月三日一五時より、家の光協会七階講堂において、第九回キブツ研修生の壮行会を開催した。主賓としてキブツ研修生及びその世話係三名併せて七六名、来賓として研修生の家族友人及び当協会関係者を併せて百余名の出席を得て、一同屋上に於て記念写真の撮影を終って、定刻開会した。

まず宮部理事長の開催の辞は、キブツ研修生派遣の主旨を述べて、昨年末は自分もイスラエル当局の招きではじめてキブツその他を視察して啓発されるところが多であった、皆さんのキブツ研修は大いに意義があると思ふ、健康には特に注意されて、充分目的を達成されることを期待すると、激励の挨拶があった。次いで新任イスラエル大使、エイタン・ロン氏より、イスラエルの現状を簡単に述べ、自分は、キブツ出身ではないが、キブツには友人も沢山おり、その独特な社会形態に深い興味を持っている、日本の青年男女諸君が毎年キブツ研修生として多数行かれることは、両国の親善交友のためにも、喜びに耐え



ないと、約二十分に亘る祝詞の挨拶があった。次に当協合理事、全農会長三橋誠氏（前全購連会長）より、全購連は早くから貿易関係がありイスラエル当局の招待で数年前に同国に行った際にキブツ・ドリヤを視察したところ、多数の日本青年が働いていることを知り深い関心をもったのであるが、若い皆さんがキブツの特長を学び、それを日本社会に参考として役立てることは、大いに意義があると思ふ。どうか健康に充分注意されて、研修の目的を達成するよう心から期待しておりますと挨拶があった。次に手塚常務理事は、旅行中の注意事項を述べた後、研修生の家族の方方に向つて中東状況の見解や現地の内容を説

明し、今後も家族会を設けて、情報の交換や研修生への理解を高める話合いをしていきたいと思ふので御了解を願いたいと話した。次いで家の光協会の奥原副会長の音頭で、研修生の祝福を祈り一同乾杯と同時に祝宴に移り、研修生代表、家族代表、その他大勢の激励の挨拶祝詞等があり、和気あいあいの内に、盛会裏に午後五時散会した。

キブツ研修生 羽田空港出発

四月四日十時三〇分、研修生一同羽田空港集合、税関手続き、家族友人との暫し訣別の歓談の後、多数の見送人の握手また握手、十一時三〇分旅客出発口から姿を消した。そして定刻〇時五十分よりやおくられてソ連航空エアフロートSU五七六便でモスクワ直行で出発した。

一行は同日十七時二〇分モスクワ着。二泊して市内見物六日十六時十分モスクワ発ソフイヤ着十八時、二泊して協同組合農場等を視察。八日列車でソフイヤ発、翌九日アテネ着一泊市内見物。十日空路テルアビブ着十六時三五分の予定である。

ハイファ出港の前夜、キブツ・ドリヤで、私はエフライムと語りあった。

キブツ運動のことを……イスラエルで今、キブツに加入する青年は、各キブツ、年に一人か二人であること……キブツ運動がキブツを作るためにあるなら、それは失敗であることなどを、今はキブツ運動が青年に何を問いかけるのかということが重要なのだと……。

帰国して二カ月、何の活動もしていないし、それは当分続くだろう。今は自分の職場を確保することと詩誌の仲間である「孤立」のメンバーや「フォルト」のメンバーと話しい、私自身の活動をえがなくてはならない。終局的には、自分の手で始める学習活動という長いそして行くあてのない軌跡をのこすことだけが存在するのだ。

私が二年間、キブツで見つめてきたことは、教育や共同体内の青年のことだけでなく、キブツの底で脈打つ、神によって自分を規

定していく生活だったのだろう。

一神教のもついやらしさみたいなものに反発し、自然回帰を説く人々の多神教が、本質的に一神教と同質であることをみている。だから、祈ることをからだで、生活で表現していたキブツの生活は、私が住む地平では、なかった。

キブツ運動は、職業として成立させるわけ

後奏曲 キブツ帰りの随想

雑草

くまごころ

にはいれない。それは、キブツ運動が、社会の一角に住みはじめた教育の補完物になりはじめているからである。

だから、それが発展した地平にキブツ運動の独自性はふみつぶされているし、構成や活動自体もその傾向の中でまわっている。私が住みえるキブツは、啓蒙運動とサヨナ

ラしたものである。

ところで、今、私がみつけたのは、日本の砂漠の中で一人がボツンと立っている自分のことであつた。

まわりは、オアシスも見えないし、手にはコンパスもないし、地図もないのだ。私は岩かげを見つけて、夜を待つて歩きはじめたのである。

日の強い昼は日かげで休み、夜は星をたよりに歩くのである。ただ一つ、自分の星にむかつて語りかけながら……。

砂漠の底に井戸を見つけれないのなら、オアシスを見つける以外ないのだから……。今はただ一つ、雑草に変身して根をのばさんと苦闘している。

（「くまごころ」こと下山弘至氏は、一九七〇年春 第七回キブツ研修生の一人としてイスラエルに渡り、最近帰国。静岡県三島市広小路町11の23に在住。）

協会 日誌

3月5日 草刈善造氏上京。
阿寒学園の構想が展開しそう。

3月6日 赤坂の聖パウロ女子修道会の「あけぼの」編集部を尋ねる。カソリックと共同体についてなど、話がはずむ。

3月8日 キブツ研修生世話係の奥村久雄、中村一郎両氏をまじえ、グループの編成について話合う。

3月12日 名古屋読者会の梶原夫妻くる。

3月18日 備北共同体の難波君や、山岸会の門脇、松村さんなど、大ぜいやってくる。

3月22日 小山宣世君、キブツから帰ってくる。

3月23日 高瀬純子さん、キブツから帰る。

3月24日 自然食品を広める運動をしている武知国夫氏に会う。生産者と消費者との間に、よりよいパイプをつくってゆく

必要性を感じる。

3月27日～29日 全国協業経営体連合会の会合に出席するために、哲は京都へ。無公害食品を生産することが、この組織にとって一つの重要なテーマになりそうだ。

4月1日 四月号の発送
4月2日 協会のスタッフとキブツ研修生の世話係とで、最終的な打合せをする。

4月3日 東京市ヶ谷の家の光会館でキブツ研修生の旅行説明会と壮行会をおこなう。

4月4日 第9回キブツ研修生の一行76人が、羽田空港を出発してイスラエルへ向かう。

4月5日 事務所の机の位置の大移動。
4月8日 湯河原でミカン園をしている高杉薫君がくる。

ぐるーぶ；もぐらの人たち、青年土曜講座の人たち、関西からきた女の人たちが自然にあつまってきたて話合う。

制作部メモ

▼しきりに思うのは、共同体を「空間づくり」としてではなくあくまで「関係づくり」あるいは「関係の発見」としてとらえたいということである。これまでの「空間づくり」のころまでの多くが、閉鎖的な空間をこしらえてしまったことに、深く思いをおよぼそう。抽象的ないい

▼毎回財政の厳しさを書くのは心苦しいが、会員拡大と継続会費の納入にぜひ協力していただきたい。

方だが、「関係」が「空間」を生み出してゆくような方向で、共同体運動を考えたい。生き生きとした関係を他人や自然との間に生み出してゆこうとするのと、それが共同体の出発点だろう。

▼毎回の財政の厳しさを書くのは心苦しいが、会員拡大と継続会費の納入にぜひ協力していただきたい。

■直接購読（入会）のすすめ

この雑誌は主に定期的な直接購読者（キブツ会会員）によって支えられています。1年間（12号）の会費は入会金（200円）とも2,000円。申込みは、現金書留か振替で、氏名、住所、生年月日、職業など書いて、送って下さい。

■月刊キブツ取扱書店

東京＝新宿紀伊国屋、神田東京堂、模索舎、ウニタ書店、国分寺アヴァン書房、駒場書店
京都＝京都書院 札幌＝富貴堂、北大生協、アテネ駅前店 仙台＝八重州書房 盛岡＝第一書房 福岡＝九大生協 名古屋＝おばた文藝センター 富山＝清明堂 松本＝遠兵衛ブックセンター 東京＝都港区芝5-16-13

■印刷所＝創土社

電話 452-0501・6069

「月刊キブツ」 1972年5月（通巻98号）
頒価 150円 送料16円（1年間2,000円）
東京都渋谷区代々木4-5-14 参宮橋ハイツ10号 日本協同体協会
電話 370-2813 振替・東京 24403

告知板

■JOE一族のコミュニティ

▽毎週、月水金曜午後一時～四時、火木土曜午前九時～四時、自宅の一室を開放してコミュニティセッションの場とする。訪問希望者は、事前に連絡のこと。

「月刊キブツ」「思想の科学」

「部族」「ボロと水」などを中心にして話合います。有形、無形の協力を。

※東京都江東区亀戸二一六 亀戸団地四一〇六 西気付
電六八二一九九九三

■心の科学会

▽青年土曜講座「日本再発見」5月27日までの毎土曜午後一時から四時まで。会場は、東京都渋谷区東一―二六―二六富士ビル六階六〇六号室（並木橋交叉点角）。

東四〇六一―六一（富士ビル）
〇四八二―五―一四九八六（神田孝一）

■みみずの会

▽毎月第四土曜の午後六時半から新宿区立赤城社会教育会館で、テーマは「労働と人間関係」
※〇三―二五五―六八七一東洋シユランク 北邦彦まで。

■労働問題研究会

▽毎月第二第四土曜日午後六時から大阪の天満橋駅から5分の大阪府立労働会館にて。
※大阪市旭区高殿郵便局留 白連大阪気付 秋岡吟

■五月リブ大会

▽「女がひとり生きてくために創りあげよう、克ちとろう」をスローガンに5月5日～7日東京の山手教会（渋谷、6・7日）、大田区産業会館講堂（蒲田、5日）でおこなわれる。
※埼玉県和光市白子2―18―51

菊美君 加藤和子 電〇四八四一―六一―三九二（夜がよい）

■公書原論

▽宇井純と講師の対談と参加者による討論という形での公開自主講座。10月2日までの毎週日曜日（七月後半～九月第一週までを除く）午後6時～9時に、東京大学（本郷）工学部大講堂でおこなう。5月の講師は、8日―民社党、15日―社会党、22日―自民党、29日―共産党。
※公開自主講座実行委員会 電〇三―八二―二二―一一内線七四一一

■べ平連

▽5月5日に「横田・立川基地を止めろ行動」を行なう。
※東京都新宿区神楽坂6の44 石井ビル 電二六七―二四七―

■アースデー

▽地球再生の日として5月5日に東京の碓ヶ崎ファーマリーパークで

集まる。朝9時から夜9時まで。渋谷谷から成城学園行のバスに乗り、NHK技研前で下車、徒歩5分。弁当持参のこと。

■安保拒否百人委員会

▽横田、三里塚などでのユニークな活動を続けている。
※川崎市西三田団地七―六―五〇一 河辺気付

■日本協同体協会

▽来訪者は、午後3時～6時ごろ来てもらうのが一番確実。
▽共同性発見集団の会合が、月一～二回のペースでおこなわれている。

■図書案内

▽「ユタヤ人―栄光をめざした五〇〇〇年」志村武著（さ・えら書房 六八〇円）―平易にえがかれたユタヤ史

表紙裏にも「告知板」あります